

琉球大学学術リポジトリ

文献紹介 Suzanne Falgout, Lin Poyer, and
Laurence M. Carucci, *Memories of War :
Micronesians in the Pacific War*, Honolulu :
University of Hawai'i Press, 2008

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 大祐, Ikegami, Daisuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34827

文献紹介

Suzanne Falgout, Lin Poyer, and Laurence M. Carucci, *Memories of War: Micronesians in the Pacific War*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.

池上大祐

Daisuke Ikegami

I. *Memories of War* の基本構成

本書は、3名のアメリカの文化人類学者—スザンヌ・ファルゴウト (Suzanne Falgout)、リン・ポイヤー (Lin Poyer)、ローレンス・M・カルルシ (Laurence M. Carucci)—によるミクロネシア住民への太平洋戦争に関する聞き取り調査をもとに編まれた著作である。聞き取り調査は、1990年から91年にかけてミクロネシア東部に位置するマーシャル諸島、およびミクロネシア中央部に位置するミクロネシア連邦で行われ、2001年に『戦争の台風』(以下、前作とする)と題する作品を発表している。前作は、聞き取りの成果と文献資料を組み合わせることで、ミクロネシアにおける太平洋戦争の歴史そのものを民族歴史的に叙述することを主眼としていた。それに対し本書は、聞き取り調査の成果で集めた様々な「語り」に注目し、太平洋戦争史ではなく、ミクロネシア住民が太平洋戦争をどのように記憶し、過去と現在をつなげようとしたのか、そして「ミクロネシア住民にとって太平洋戦争とは何だったのか」ということを問うことに焦点をあてている。

本書の構成は、第1部「背景 (Backgrounds)」、第2部「太平洋戦争についてのミクロネシア住民の理解 (Micronesian Understandings of the Pacific War)」、第3部「ミクロネシア住民の観点 (Micronesian Vantage

Point)」、第4部「ミクロネシア住民の戦時の語りにおける文化的テーマ (Cultural Themes in Micronesian Wartime Narratives)」、第5部「結論 (Conclusions)」の5部(全14章)となっている。大まかにいえば、ミクロネシアに関する地理的歴史的概要および記憶研究に関する理論的整理が第1部、太平洋戦争開戦前夜、開戦、展開、末期、そして米軍占領開始期のそれぞれの時期における証言が第2部～4部で展開されている。

なお、聞き取り調査は、スザンヌがカロリン諸島東部に位置するボンベイ島(ボナベ)とクサイエ島を、リンがカロリン諸島中央部と西部に位置するチューク環礁とヤップ島を、ローレンスはマーシャル諸島各地を担当し、それぞれ現地のコンサルタントや通訳、若手研究スタッフを帯同させていた。話者が日本語での「語り」のときには、日本人スタッフが翻訳を助力している。メンバー構成および聞き取り調査対象となったミクロネシア各地の住民の氏名一覧も本書巻末に収録されている¹⁴⁾。

さて、本書の内容について紹介していくにあたって、本書では聞き取り調査による証言が膨大に引用されており、そのひとつひとつを取り上げることは紙幅の関係上困難となる。したがって本稿では、本書全体の内容をおさえつつ、もっとも著者の見解や分析が展開されている第1部の2章(理論的背景)と第5部の13章を重点的に紹介していく。

Ⅱ. *Memories of War* の内容

(1) 理論的な位置づけ－第1部

第1部の1章「『ミクロネシア』」では、ミクロネシアの地理的配置・言語体系・文化・慣習に関する概要にくわえ、1521年のマゼランによるグアム上陸、その後のグアムを含むマリアナ諸島およびカロリン諸島に対するスペイン統治、1885年からのドイツによるマーシャル諸島の領有、1898年の米西戦争後のドイツによるマリアナ諸島・カロリン諸島のスペインからの購入に

ついて完結に触れられている。本書の根幹となる、第一次世界大戦後の日本委任統治時代、ミクロネシアにおける太平洋戦争の展開、戦後のミクロネシアの状況（アメリカの信託統治、1980年代の独立過程）に関する歴史的経緯については、19世紀までの説明と比べてやや詳細に整理されている。

第2章「文化的記憶と太平洋戦争（Cultural Memories and The Pacific War）」は、ミクロネシア住民の太平洋戦争の経験をどう記憶しているのかを分析するために「文化的記憶」という概念を提示し、その理論的整理を行う。著者は、社会学者モーリス・アルブヴァクス（Maurice Halbwachs）の「集合的記憶（collective memories）」論－「記憶は文化的に構築され、変化に対して開かれている。」「過去の記憶は、文化の現在の関心によって概して形成される。」「記憶は、あらゆる知識と同様に、生産／再生産され、人生における社会的、政治的、個人的な圧力に従属する。」－を参照しつつ、「記憶はいつも文化的である。なぜなら、記憶する人間は文化的存在であるからである」と論じ、この意味で生成される記憶を「文化的記憶」としている。ただ著者は、心理学者ユングがいうような「集団の記憶（group memory）」という概念とは一線を画し、あくまで「文化的記憶」の土台は「個人の記憶」であるとする。

元来、ミクロネシア社会の文化において、過去（古代の伝説や神話）を現代の世代に語る際、その役割を担うのは年配者であり、自分の祖先の世代にさかのぼりながら語る。その伝説の語りは、「個人的な所有物」とされ、特定の人物だけにのみそれらを所有し使用する権利をもつことから、「他人の物語」を語ることは許されないという。しかし、それとは対照的に、第二次大戦に関する物語、歌、踊りについては、その話者、聞く者が限定されておらず、過去と現在を関連付けるようにしながら、オープンに表明される。そこで著者は、戦争経験に関する個人の記憶が文化的な存在となるプロセスを理解するために、「覚える行為（remembering）の文化的作業」をみていくことの必要性を強調する。その「覚える行為」は、話者による戦争経験の

語りだけではなく、パフォーマンス（歌、踊り）、祝典、景観からも表象されるといふ。本書の随所で、戦争経験を盛り込んだ歌詞が多く収録されているのも「文化的記憶」の構築過程を深く探っていこうとする著者の意図が反映されている。

続けて著者は、歌唱や踊りといったパフォーマンスの次に、重要なミクロネシア人の戦争記憶方法として「祝典（commemoration）」を挙げている。太平洋戦争末期に、アメリカの中部太平洋方面軍によって制圧されたミクロネシアの各地域は、その戦闘終結日を「解放の日（Liberation Day）」—著者の説明では、「アメリカ軍が上陸し、日本人が公式に降伏したかあるいはミクロネシア人が彼らの戦時の苦難から解放された日」—と設定し、年1度の祝典を開催しているという。ただ、著者も断りを入れているように、「アメリカ軍の最初の到着がすべてのミクロネシア人によって「解放」としてみなされた」わけではなく、米軍が使用しはじめた「解放」を、今日もなおミクロネシア住民が使用している、という事実を指摘するにとどめている。「解放の日」は、地域ごとに違いはあるが、特にグアム（マリアナ諸島）、コルサエ島やボンベイ島（カロリン諸島）、エニウエトク環礁（マーシャル諸島）では、学校や公務を休業にし、その休日を記念するためのスポーツ、カヌーレース、踊り、教会事業、讃美歌のパフォーマンスなどが行われている。この祝典が「新しい世代に歴史的知識を啓発し、戦時記憶を維持させるために使用」されているという。一方で、米軍上陸を経験していない地域では、「解放の日」に祝典が大々的に行われていない事例（マーシャル諸島のマロエラップ環礁とアルノ環礁、カロリン諸島のヤップ島、チューク島）もあり、「解放」の意味＝戦争の本質を問うにあたって、きわめて興味深い。

そして2章の最後に、著者が調査した1990年代の時代背景について述べられている。当時のミクロネシアは、米軍の信託統治から脱却し、カロリン諸島は「ミクロネシア連邦」として、マーシャル諸島は「マーシャル諸島共和

国]として独立したばかりであった。ただ独立との「取引」としてアメリカとの「自由連合協定」を締結し、軍事戦略上の権限はアメリカの手中に残された。こうした米軍とのつながりが、湾岸戦争という現実と直面するなかで、またミクロネシアが戦争にまきこまれるのか、という不安感を、現地で調査協力(通訳など)を行った現地コンサルタントがもらしていたという。まさしく太平洋戦争の経験をめぐる「文化的記憶」は、こうした記憶の行為をへて、過去と現在を結び付けていく機能をもつことになる。これを実証するために、本書は、第2部、第3部、第4部へと展開していく。

(2) 展開—第2部から第4部

第2部は、ミクロネシア住民が元来認識してきた伝統的戦争観とはまるで異なる太平洋戦争を、その住民はどのように理解したのか、さらに具体的にどのような体験があったのかを分析している。伝統的戦争観については、3章「戦争の意味(The Meaning of War)」で説明がなされ、続けて4章「戦争の衝撃(The Shock of War)」、5章「苦難と苦しみ(Hardship and Suffering)」、6章「戦闘経験(Combat Experience)」にて、その戦争の開始をどのように認識したのか、実際にどのような苦難があったのか、彼らにとっての「戦闘」とは何か垣間見ることができる証言で構成される。ここで主眼とされているのは、太平洋戦争の軍事戦略上のミクロネシアの位置づけを明らかにすることではなく、彼らの経験そのものである。

第3部は、第2部で紹介されてきたような様々な戦争経験をもとに、ミクロネシア住民が太平洋戦争を全体としてどのような出来事として認識したのかについて、様々な語り、歌詞から分析を進めている。ミクロネシア住民の観点では、太平洋戦争は「遠くで始まって突然自分たちの生活に入り込んだ戦争」であるという認識が根幹にある。その認識の在り様については、7章「「これは我々の戦争ではない」(It was not our war)」および8章「戦争の台風(The typhoon of war)」で展開されている。9章「忠誠の間

題(Questions of Loyalty)」、10章「戦時の抑圧に対するミクロネシア住民の反応 (Micronesian Responses to Wartime Pressure)」では、ミクロネシア住民からみた日本人およびアメリカ人に対する認識の多様性が読み取れる証言で編まれている。

第4部は、ミクロネシア住民の日々の生活のなかで営まれる過去の伝説語り、歌作り、世間話における「特定の話題」(=著者は「優先事(preoccupations)」という語句を使用する)のなかに戦争の記憶が入り込んでいる事例を多くの証言から抽出している。「幸福、欠乏と豊かさ、そして気前良さの概念、ロマンス、族長、そして訪問者の到着と出発」が主にミクロネシア住民にとっての「優先事」であるが、そのなかにしばしば戦争期の経験が想起されるという。また、著者の分析によれば、その戦争の想起は、城内で文化の相違があるミクロネシアにおいて特定の一貫性をもって共有されている歴史、哲学、生活スタイルによって創出されるものである。その具体的な内容は、11章「いくつかのミクロネシア住民の優先事 (Some Micronesian preoccupations)」、12章「出会いと別れ (Greetings and farewells)」で展開され、ミクロネシア住民の生活感覚から日本、アメリカ、そして太平洋戦争へのまなざしがいかに多様であるかを数々の証言をもって展開している。

(3) 結論 - 第5部

第5部「結論」の13章「現代世界における戦時の記憶 (Wartime Memories in the Modern World)」は、本書全体の分析結果を「文化的記憶」の形成の観点から整理している。著者は、文化的記憶を「個人の人生によってのみ形成されるのではなく、社会的要因および文化的理解によって、個人や諸集団の視点によって、そして文化的関心によって形成される」ものとして捉えようとする分析視覚を再度確認しながら、以下の点を強調する。「戦争についての人々の物語を理解するために、我々は彼らの経験の単

なる事実、「戦争の時期に彼らに何が起きたのか」ということ以上のことを理解しなければならない。我々は、その記憶がコード化され、それらが語られる文化も理解しなければならない。何がもっとも重大なのかというそれぞれの文化の概念と、いかにして物語は形成され、語られるのかについてのそれぞれの文化的要件は、個人と共同社会の記憶のなかで重なり合う。」

以上が、ミクロネシア住民への聞き取り調査をもとにした著者の実証的研究の成果であるが、続けて現在のミクロネシアの社会状況と戦争体験の「文化的記憶」との関連性について、主にグローバルな文脈、アメリカ化、ナショナル・アイデンティティ形成という三つの観点から補足している。

第一にグローバルな文脈についてであるが、著者によれば、戦争当時は戦争に関する情報にアクセスできる手段がなかったことからミクロネシア住民は、自分たちの地域以外での戦争の状況を知ることがなかった。しかし、戦後から現代にかけて、日米双方の元軍人（日本では元植民地統治時代の文民も含めて）がたびたびミクロネシアを訪問するようになった。具体的には、日本人の年配者が、遺骨収集・記念事業の開催・旧知のミクロネシア住民との再接触（戦後の本国送還時に現地に残したミクロネシアの親族を探すことも含む）などを行ったり、ポーンベ降伏55周年の「解放の日」式典に米国艦船船員の生存者とその家族が招待されたりするなど、ミクロネシア住民の「外」とのつながりが戦後に蓄積されていった。また、こうした「外」とのつながりは、国際的観光地としての経済価値を付加することになった。たとえば、チュークのような激戦地（1944年2月の戦闘）では、海中に今なお残存する日本の艦船の残骸—「幽霊艦隊」—がダイバーを魅了し、チュークの観光の目玉のひとつを構成しているという。

第二の観点の「アメリカ化」について。著者は、戦後ミクロネシアは自給自足経済となり、その生活水準は日本統治期以下であったが、医療・教育・民主主義の訓練・自由をアメリカはもたらしたという。さらにいうには、ミクロネシア住民はその価値を認識したのであり、現在のミクロネシア諸国家

は「アメリカの理念の大部分を土台としている」とのことである。

第三にナショナル・アイデンティティ形成について。1989年にミクロネシア連邦の新首都がポーンベイ島に設置される際に、その式典で披露された新しいダンス-ヤップ島の舞踊家が構成し、ヤップ島旧知事が英訳した一の内容のモチーフに、第二次世界大戦での経験が利用されたことの意味について、著者は、新しい国家として統合する際の立脚地点として戦争が表象されていると読み込む。また独立以来、ミクロネシア住民からハワイおよびグアムへの移民が増加するなかで、移住先で自らの出自を説明する際に、「マーシャル人」や「ミクロネシア人」という新生国家の枠組みによる自己認識を示すことがあるという。多くのハワイ住民は、「マーシャル人」がミクロネシア領域出身であるということや、「ミクロネシア人」はコスラエ、ポーンベイ、チューク、ヤップの別個の文化を包含していることを理解していないことから、創出されるナショナル・アイデンティティはまだ不安定である現状もあるが、それでも、ミクロネシアからの移民のこのような自己認識が他者からも認識されることによって、より一層ナショナル・アイデンティティが強化されていく可能性がある」と著者は述べる。そして最後に、著者は以下の言葉で本書を締めくくる。「自身のローカル・アイデンティティを断固として維持し、しかし、西洋と日本の植民地主義、特に第二次大戦の経験を共有する「ミクロネシア人」は、自らを、より広い世界の一部、アメリカ、彼らの地域 (region) そして彼らの新生の国民国家として同一視しはじめている」。

II. *Memories of War*の課題

以上が、本書の大まかな内容である。広範囲な規模での聞き取り調査の成果がふんだんに織り込まれ、ミクロネシア住民にとっての戦争経験の多面性・複雑性が読み取れる本書の意義は、その資料的価値の点からもみて極めて高いといえる。ただ本書にも弱点が存在する。それは、ミクロネシア住民

が共有してきた「文化的記憶」を、グローバルな文脈、アメリカ化、ナショナル・アイデンティティ形成という三つの観点に位置づける作業（13章）は、第2部から第4部にかけて収録されている証言や語りをもとに実証・論証したものではなく、現象の紹介にとどまっている点である。

例をあげれば、ミクロネシア連邦の若者の米軍入隊数が増加し、湾岸戦争（the Gulf Wars）に従軍して多くの犠牲者を出しているという現状と、特に第一次湾岸戦争（1990年）のときに、その島々が、「厳しくなった郵便規制と関税実施、特別な教会事業と戦争報道に専念したラジオ放送、そしてそれらの中心にいるアメリカ人が彼らの島に戦争をもたらすかもしれないという恐怖」を目の当たりにしたことで、第二次大戦についての年配者の記憶が重要性を持つようになったという事例を、著者はミクロネシアにおけるナショナル・アイデンティティ形成の文脈で取り上げているが、この叙述だけでは、そのつながりが見えにくい。湾岸戦争のアナロジーとして太平洋戦争の記憶が動員されることが読みとれる証言もここではもりこまれるべきであろう。

また、「アメリカ化」のついでの評価も、やや単純化しすぎていることも問題であろう。米軍の上陸地点となったマーシャル諸島内のエニウエトク環礁とクェゼリン環礁の住民に聞き取りを行っているが、その作業のなかで、戦後のアメリカ統治がもたらした「核実験」に関する言及があったのかどうか触れられていない。エニウエトク環礁は実験場として活用され、同じく核実験場とされたビキニ住民の一時移住先となったのがクェゼリン環礁である以上、アメリカがもたらした「自由」の負の側面に対する著者のスタンスや向き合い方が本書を読む限りでは読み取れなかったのが残念であった。こうした点を実証的に補ってこそ、本書の根幹となっている「戦争経験の文化的記憶が過去と現在をつなぐ」という目的がより説得的に活写できるものと考ええる。

それでも、本書を通読することで、太平洋諸島の人々の「親目的」な言説

や対応のみに注目し、「日本人らしさ」、「日本の誇り」、「日本への愛情」（裏を返せば、「戦争責任」を「叫ぶ」、「反日的」な中国や朝鮮半島の人々に対する否定的な感情）を生産しつづける安易な諸言説がいかにバランスを欠いたものであるかが、はっきりとわかるであろう。ミクロネシア住民－戦争を体験した者－の生き様に寄り添う姿勢こそが、「戦争」そのものを理解し、乗り越えていくためのスタートラインとなる。このことに気付かせてくれることが本書の最大の魅力であろう。

－註－

- (i) なお、本書は、同じくミクロネシアを構成するパラオ諸島の戦争に関するオーラルヒストリーについては、Higuchi, Wkako 氏の研究に依拠している。マリアナ諸島の戦争記憶については、近年、Keith Camacho, *Culture of Commemoration : The Politics of war, Memory, and History in the Mariana Islands*, Honolulu : University of Hawai'i Press, 2011 が発表されており、その第1章「忠誠と解放」の翻訳が『思想』（2015年8月号）に収録されている。